

田上 時子のエッセイ

剣道と孫

子ども時代に体を動かすことは心身の健全な成長を促すのみならず、記憶力や体感力にもいいことが明らかになっている。がしかし、近年、携帯型ゲーム機やスマートフォンの普及もあり、子ども達は家の中でも外でもどこでもゲームを楽しめる環境にあり、ゲーム漬けの傾向が問題だと指摘してきた。

当時小3の孫も例外でなかったの、家族会議の結果、「剣道」稽古に送り込むことになったのが昨年9月で、「たからづか剣道会」のご指導もあり、今年に入ってから個人戦や団体戦に出させてもらっている。

試合観戦するために、勝敗がどう決まるのかわらねばならないが、剣道と無縁の世界にいたので、本で読んで分らない。

当NPO法人の浮穴正博監事が剣道3段と小耳に挟んだので、これ幸いとメールで問い合わせた。

「心技体の一致で決まります。平たく言うと面なら「めん」という声（気合）と姿勢やタイミングでしょうか。それと、竹刀の打突（たとつ）部位も見られます。相手を竹刀で打つ場合は竹刀の先端から3分の1ぐらいの中締め（竹刀のその辺に細い革ひもで結んでいるところ）まで打つのが正解です。あまり手元に近かったり、先っぽ過ぎても「1本！」にはなりません。まあ、気合によっては審判員の手が上がる場合もあるかもわかりませんが、小学生の場合はどうかな・・・」との答え。成るほど・・・。

剣道の歴史は江戸時代に始まる。江戸時代後期には、竹刀打ち中心の道場が興隆し、流派を超えて試合が行われたという。「剣術」という名から「剣道」という名称が定着したのは明治末から大正期である。

女性の剣道は、戦後の男女共学や女性の社会進出に伴い1960年から70年に始まったが、試合は男女別々に行われる。

剣道の理念は「剣の理法の修練による人間形成の道である」という。

真剣に向き合って指導してくれる指導者と一緒に稽古に励む仲間、それを支援する保護者の方々との出会いに、家族として只々感謝である。

5月の試合後、孫は次のように作文を書いていた。

「宝塚市立スポーツセンターで宝塚市民剣道大会がありました。ぼくは4年生の部の個人戦に出場しました。開会式が終わったら先生に「一番目やからメン着けて」と言われて、ぼくはメンを着けました。試合が始まって2分がたちました。「やあ～めん」と言いながら、竹刀を振り落とすとメンが当たってぼくが勝ちました。二回戦は三年連続優勝している人と運わるく当たって、負けちゃいました（原文のまま）。」

